

1 「あら 私の墓を掘っているのは」

「あら 私の墓を掘っているのは
哀^{ヘン}し^ルみの^ー苗^ダを植えているのは 愛するあなたかしら」

「いいえ あなたの愛する人は 昨日結婚しましたよ

お金持ちで 最高にきれいな女性と

『もう 亡妻に真心を尽くさなくても 5

傷つける筈もないし』と言って」

「じゃあ 私の墓を掘っているのは誰かしら

私に一番近い 大切な親戚たちかしら」

「いいえ 皆な思案に暮れています

『花を植えても無駄なこと 10

墓をきれいに飾っても 死神の罠から

霊^{たましい}を救うことは出来ないさ』と言って」

「でも 誰かが私の墓を掘るのよ

こそこそと突くのは 私の恋仇^{こいがたき}かしら」

「いいえ 人間みなに いずれは閉まるあの門を 15

あなたが通ったと聞いたとき

その女性^{ひと}は あなたをもう憎む価値もないと思って

永眠^{おやすみ}の場所など 気にもしません」

「だったら 私の墓を掘っているのは誰かしら

教えてよ 私には思い付かないもの」 20

「ああ 僕ですよ 大切な奥様

あなたの愛犬です まだこの近くで暮らしています

僕がここを動きまわって

奥様^{おやすみ}の永眠の邪魔をしたでしょうか」

「ああ そうね 私の墓を掘るのはお前よね 25

どうして思い付かなかったのかしら

忠実な者をひとりだけ あとに残してきたことを

いったい 人の心の中に

犬ほどの忠実さは
あるのかしら」

30

「奥様 僕があなたの墓を掘ったのは
骨を一本 埋めようとしたからです
毎日の散歩の途中 この辺りで
お腹が空くと困りますから
すみません でもすっかり忘れていました
ここが 奥様の永眠^{おやすみ}の場所だなんて」

35

(近藤和子訳)